

学位論文題名

北海道における歴史を生かしたまちづくりの展開と 市民意識の形成に関する研究

学位論文内容の要旨

わが国では1980年代頃から、地域やまちの歴史を物語るさまざまな歴史的資産の価値を見直し活用を図りながらまちづくりを進めていく動きがみられるようになり、明治以降本格的な開拓がなされ本州各地に比べまちの形成の歴史が浅い北海道でも各地で関連した事業活動が展開されてきた。これらは「歴史を生かしたまちづくり」(以下、歴まち)としてまちづくりの一分野に位置づけられつつあるが、近年の地域に密着した市民参加によるパートナーシップ型まちづくりの浸透、さらに文化財等の歴史的環境に対する柔軟な考え方に伴って、歴まちも新たな展開へ向けこれまでの経験や実績をふまえた今後のあり方についての再検討が求められている。しかし一方、これらに関する研究は、これまで個別事例の研究はされていたが、広域的総合的な視点からの研究はほとんどなされていない状況にあった。

本論文は、歴まちの展開を捉える基本的視点として「地域性と多様性」「関係性と総合性」「継続性と発展性」の3つを据え、北海道における歴まち展開について、関連の事業施策と市民活動のこれまでの展開実態および市民意識とイメージ形成の実態分析から現状における問題点や可能性等の特質を実証的に検討し、市民との密接な関係性にもとづいた今後のさらなる展開を図っていく上で留意すべき基本的な課題を明らかにしようとしたものである。

本論文は3部11章より構成されている。各部各章の概要は以下のとおりである。

第Ⅰ部は序論で、2章からなる。第1章：研究の背景・目的を述べるとともに、本論に関する用語・概念と既往研究の検討から本論の位置づけを行い、論文全体の構成を示した。第2章：本論展開の基礎的認識として、歴史的環境をめぐるわが国および北海道の戦後の動向について概観した。全国および北海道の総合計画等における歴史的環境の位置づけ、各省庁の関連施策、関連法制度、関連分野学会での議論活動等の動向から、1990年代後半以降、歴まち展開に関わる社会的状況が大きく変化し新たな段階に入ってきたことを指摘するとともに、道内各市町村の文化財施策や歴史的建造物等の概況から、北海道の今後の課題や可能性に関わる基礎認識を得た。

第Ⅱ部は、北海道における歴まちに関する事業施策と市民活動のこれまでの展開動向を把握分析したもので、以下の4章からなる。第3章：北海道および各市町村における歴まち事業の展開について把握分析した。北海道の戦略プロジェクト「歴史を生かすまちづくり」事業の展開状況を検討した上で、これまで全体像が明らかにされていなかった北海道における歴まち関連事業の全道的な事例把握を行い、その展開動向について地域的および内容的な広がりや市民・住民との関わりに着目して、その特徴や問題点等を明らかにした。さらに、事業展開の先進都市を事例に、具体的事業の展開について推進組織や市民・住民との関わりに着目して検討し、現状での問題点や今後の課題等について考察した。第4章：前章の分析結果をふまえ、歴まち事業の重要な一つとして取り組まれてきた歴史的建物の博物館施設への

保存・活用に着目し、これまで把握されていなかった全道的な事例把握と類型化を行い、各施設分類別の活用実態の特徴や問題点等を整理し今後の課題を考察した。第5章：歴史的環境に関わる市民活動団体に着目し、各市町村における活動団体の全道的な実態把握と具体的な活動事例の分析を行った。先ずこれまで明らかにされていなかった歴史的環境に関わる市民活動団体の全道的把握を行い、各団体へのアンケート調査から活動実態と活動主体の意識実態を分析し、その特徴や問題点を明らかにするとともに今後の課題や可能性について考察した。さらに、歴史的環境に関わる一連のまちづくり事象が展開された函館市を事例に展開過程における市民活動団体と行政との関わりに着目した分析と、歴史的建造物等の保存・再生に関わる代表的な市民活動団体4事例の活動経緯や活動内容を把握検討し、歴まちにおける市民活動団体の意義や役割について考察した。第6章：中枢都市札幌市を北海道の歴まち展開にとっても重要な都市と位置づけ、歴史的環境に対するこれまでの取り組みについて、行政による歴史的建物の保存活用施策と総合計画や各種関連の計画・条例等における歴史的環境の位置づけを検討し、さらに住民参加により展開された区のまちづくり事業とビジョンづくりにおける歴史的環境に対する取り組みを比較分析し、これまでの展開における問題点と今後の課題や可能性を明らかにした。

第Ⅲ部は、都市や地区の歴史的環境とまちづくりに対する市民意識および市民の都市イメージ形成から分析検討したもので、以下の4章からなる。第7章：函館市、札幌市山鼻地区、伊達市を事例とした市民意識調査をもとに、市民のまち意識および歴史的資産やまちづくり事業に対する意識・評価の実態を把握分析し、市民意識の形成からみた今後のまちづくり展開に関わる問題点や課題を検討した。歴史的な地区あるいは地名を有する函館市および山鼻地区の分析では市民・地区住民のまちに対する愛着や関心、認知と認知意欲等のまち意識形成の中で歴史的環境に対する意識がどのように位置づけられているかを中心に分析し、多くの歴まち事業に取り組んでいる伊達市では歴史的資産やまちづくり事業に対する一般市民層とオピニオンリーダー層との違いに着目して分析検討した。第8章：札幌市を事例に、市民の都市イメージがどのように形成されているか、空間要素全般と建築物・道空間・地区空間について各個別の全市的なイメージ調査をもとに、全市的な形成傾向を把握分析するとともに、市民イメージの形成からみた歴史的環境に関わる問題点や課題について考察した。第9章：小樽市を事例に、札幌と同じ調査手法を用いた都市空間要素全般に対するイメージ調査をもとに、小樽市民の都市空間に対するイメージ形成の傾向とその特徴を明らかにし、歴史的建造物等の現況とどのような関係にあるかについて分析検討を加え、小樽の歴史的環境とまちづくりの今後のあり方に関わる問題点や課題について考察した。第10章：第8章・9章の札幌市・小樽市に函館市のイメージ調査の分析結果を加え、これら北海道の中で歴史的環境を有する代表的な3都市を事例に、市民の都市イメージの中で歴史的要素がどの様に位置づけられているか、歴史的環境に着目した全体的な傾向と主要要素の想起傾向を比較分析するとともに、イメージ形成傾向と各都市の歴史的な建造物・地区の指定やその分布状況などの関わり、および歴史的要素の想起理由からも比較検討を加え、3都市における歴史的側面からみたイメージ形成の共通性や特異性およびその背景について考察した。

第11章は本論の結章で、第Ⅱ部と第Ⅲ部の実態分析で得られた結果をもとに、今後の北海道における市民との関係性にもとづいた歴まち展開に関わる現状での問題点や可能性等の特質と、今後のさらなる展開を図っていく上で留意すべき基本的な課題について、歴まち展開における「地域性と多様性」「関係性と総合性」「継続性と発展性」の基本的視点から総合的に検討し整理した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 越 野 武
副 査 教 授 眞 嶋 二 郎
副 査 教 授 小 林 英 嗣
副 査 助 教 授 角 幸 博

学 位 論 文 題 名

北海道における歴史を生かしたまちづくりの展開と 市民意識の形成に関する研究

わが国では1980年代頃から、地域の歴史的資産を活用しながらまちづくりを進めようとする動きが顕著となり、北海道でも各地で同様の事業活動が展開されてきた。これらは「歴史を生かしたまちづくり」（以下、歴まち）としてまちづくりの主要な位置の一角を占めるようになりつつあるが、市民参加によるまちづくりの浸透や歴史的資産に対する考え方の多様化など、この問題を取りまく社会的状況が大きく変化してきており、歴まちの新たな展開へ向けてこれまでの経験や実績の再検討が求められている。

本論文は、北海道の歴史的地域性を生かした歴まち展開の可能性に着目し、その展開を捉える基本的視点として「地域性と多様性」「関係性と総合性」「継続性と発展性」の3つを据えて、歴まちの主要事象である事業施策と市民活動の道内各市町村における事例分析（第Ⅱ部）と、一方での市民の意識・イメージ形成の実態分析（第Ⅲ部）との双方から、現状における問題点や可能性などの特質を実証的に検討し、今後の基本的な課題を明らかにしている。

第Ⅰ部「序論」では研究の背景・目的、既往研究の検討と、歴史的環境をめぐる日本内外および北海道における戦後の動向を概観している。次いで第Ⅱ部「歴まちの事業施策と市民活動」では、全道的な視野から、これまで網羅的に明らかにされることのなかった歴まち関連の諸事業と、市民活動団体の事例を把握し、その地域的内容的な広がり
の状況を明らかにし、さらにこれらの実態分析から各市町村の事業展開と市民との関係、市民団体成立のきっかけや活動上の問題および地域との関係などについて実態を解明している。事業施策の個別事例分析では、1988年から10年間継続された北海道の戦略プロジェクト「歴史を生かすまちづくり」事業展開を概括した上で、その対象都市を事例

に歴まち事業の推進体制および市民との関わりについて問題点を考察している（第3章）。歴史的建物の保存と利活用では最も類例の多い博物館転用を取りあげ、全道的な現況とその問題点を分析している（第4章）。市民活動の事例分析では全道的な現況のほか、函館市の歴史的環境に関わる一連のまちづくり事象における市民団体と行政との関わり、および歴史的資産の保存再生に関わる代表的な市民団体4事例の分析から、歴まちにおける市民活動組織の意義や役割について考察している（第5章）。さらに札幌市を対象に、行政による歴史的建物の保存活用施策と、これに関連する諸計画や構想などにおける歴史的環境の位置づけを検討し、さらに市民参加により展開された各区のまちづくり事業とビジョンづくりにおける歴史的環境に対する取り組みを比較分析して、問題点や今後の可能性について考察している（第6章）。

第Ⅲ部「歴史的環境とまちづくりに対する市民意識・イメージの形成」では、まず市民意識に関して、まちに対する愛着や関心、認知や認知意欲などの「まち意識」の形成と、歴史的資産および歴まちに対する市民の意識・評価の2つの側面から、前者は函館市と札幌市山鼻地区を事例に、後者は伊達市での意識調査をもとに分析検討している（第7章）。市民の都市イメージに関しては、歴史的環境を有する道内の代表的な都市、札幌市・小樽市・函館市の3都市を取りあげ、都市空間要素に着目した全市的なイメージ調査をもとに、各都市の市民イメージ形成の全体像を把握し、その中で歴史的要素がどのような位置づけにあるかを分析して、イメージ形成からみた今後の問題点を考察している（第8～10章）。

第11章「結章」では以上の実態分析結果をもとに、現状における特質と今後の基本的な課題について、歴まち展開を捉える3つの基本視点から総合的に検討整理し、主な課題として各市町村における歴史的資産の発掘と事業の多様な展開の促進、市民活動の進展、特に学習・交流型活動の育成と活動促進に向けての総合的な支援、歴まちにおける市民や市民活動との密接な関係性の促進、さらに歴まち展開に関わる諸要素間の関係性をふまえた総合的な視点からの対応が求められることなどを明らかにしている。

以上のように本論文は、今後さらに進展するであろう歴史を生かしたまちづくりの、北海道における初動的段階を総合的に総括したものであり、特に市民参加をめぐる問題点の分析、および一般市民の意識内に形成される都市イメージの側からの解明は、今後のまちづくり施策に有効な多くの知見を生みだしており、建築学および都市計画学に対して貢献するところ大なるものがある。よって著者は北海道大学博士（工学）の学位を授与される資格あるものと認める。